

# 後漢末期の隱逸

下見隆雄

『後漢書』逸民伝には、政治的環境に対して身を隔てて、独自の生活信条の中に生き、その志の高いことが為政者に注目されて、出仕を求められても、終始これに従わなかった隱逸者の伝が連ねられている。これは彼等が何らかのかたちで社会的位置づけを与えられていた証左と云えよう。彼等の扱いについて興味深いのは、為政者の支配の影響外に在ろうとするところが、返って為政者から召致の価値対象とされ、しかも結局この召致を拒否することが許容されることである。ところでこの逸民伝に限らず、列伝43に列せられる処士等を初めとして、他の部分にも、天子や州郡の権力者等の徵辟に従わず、出仕を拒んで、政治世界から身を隔てた例は多数指摘できる。また政治家として顕著な活躍をした者でも、同様に仕出を拒否したり、就官を辞退した例の多いことは、既に先学の指摘するところである。後漢時代、儒教理念の現実政治世界における実現が進められた結果、返って理念の形式化が著しくなった。郷村共同体においても、儒教的教養に加えて、高潔の志を保持してこれを現実の行動に表現する者が、尊崇の対象とされ、この考え方が、ひいては政治世界に自己を位置づけるための尺度とさえされた。政治世界との間に、ある種の間隔を置くが如く身を処することに、一定の政治的現実の意味が認められる傾向が深まったことと、上述の様な後漢時代の風潮とは深い関わりを持っていると思われる。この現象は他面から云えば、後漢時代、中央権力がそれ自体の様々の矛盾を含みつつ、地方豪族の発展の勢を吸収・統轄するだけの力になり切れず、返って社会矛盾を培養する結果を招き、王朝崩壊に進みゆく歴史的現実を反映した現象とも解釈できるであろう。私はこの小論において、儒教を政治理念として把持した後漢王朝において、政治的現実を背を向ける、いわゆる隱逸的存在者が、いわば一種の社会的地位を与えられる結果を

招いた状況について論じ、後漢末期における隠逸者の姿の一面を明らかにしてみたい。このため先ず、社会的関心も無く、政局に対して建設的な理論も持たず、従って政治的には全く無用と思われる人物が、為政者や、政治世界に積極的関心や努力を傾ける人々、また周囲からも、尊敬を受け興味を持たれた例に注目してみる。

(一)

「列伝」43には、その志や徳行の評判が為政者に注目され、選挙や辟召の対象とされながら、政治的環境に束縛されることを好まず、出仕を拒んだ、いわゆる処士の伝が列せられている。このような隠逸の人士が、何故出仕を拒んで孤高の途を貫いたかについては、様々な理由が考えられる。中でも、魏桓・徐穉・姜肱・申屠蟠らについては、袁閔（列伝35）も含めて、後漢末のいわゆる清流・濁流の政争や党錮の事件などとの関連が指摘されて、儒教的価値基準の名目化・外在化をもたらす、当時の政界と与論の在り方に対する抗議行為と見られたり、また、これら逸民の士も、抵抗運動としての清流勢力を構成する一方の要素であった等の解釈が注目される。彼等をこのように位置づける見解にも一理があるが、私は、<sup>①</sup>彼等自身が社会に対して、積極的な政治活動や抗議行動をする現実的な問題意識を持っていた様には思われない点に注目してみたい。彼等は政治との関わりを持たない処世観を持つことで、一種の社会的地位を形成していたのであり、これには後漢中期から末期にかけての、政治の世界を中心とする処士尊重の風潮が大きな影響を与えていると思われる。このことを先ず黄憲（列伝34）の場合を例にして考えてみたい。

彼の生卒年代は明確ではないが、ほぼ安・順・桓帝の時代を生きた人物と考えて良いであろう。荀淑は彼に遇って、「子吾之師表」と嘆じ、顔回に比している。<sup>②</sup>戴良も彼を「不自以為不及，既覩其人，則瞻之在前，忽焉在後，固難得而測矣」と評し、陳蕃・周舉は「時月之間・不見黃生，則鄙吝之萌復存乎心」と云っており、郭泰は「澄之不清，滯之不濁，不可量也」と称したと云われる。当時のこれ

ほどの名士から注目された彼が、一体何如なる思想を持ち、どんな具体的な働きを為したのか、本伝には何も記さない。范曄もその資料を持たなかったとは、論に、「黄憲 言論風旨、無所伝聞、然士君子見之者、靡不服深遠去斑吝、将以道周性全、無德而称乎」と述べていることで明らかである。そしてまた、黄憲については、その思想や業績を明確にしようとする自体が無意味なことであることがわかる。彼が多数の名士に注目され興味を持たれる理由は、実は彼が何を考えている人物かをつかむ対象となるような実質を一切持たず、もともと言論風旨の伝わるような人物ではなかったところに在るからである。戴良の様に、世俗になじむことを拒否して、超俗的な生き方を理想とした者が、測り難いと嘆ずるのは、良が意識的・積極的に到達せんとする境地を、憲は、自ら進んで求めることなく、既に生来的に具有している人物と受け取ったからであろう。良が世俗に抗し、終には家族を引連れて江夏山中に逃避するのは、世俗においては、常に礼俗に対立させなければ存立し得ない自己を救出したいからであろう。良には、確かな資質に根ざす厳しい思想が、彼にとって我慢ならぬ礼俗との衝突の過程で、様々な苦痛を伴って生み出されていく。この苦痛から自由になるために、彼は礼俗との衝撃のない世界へ逃げるのであるから、憲が良にとって測り難いのは、憲がその礼俗を意識することなく超え得て存在しているからであり、さらに云えば憲が、本来、儒教の学問についても礼俗に対しても、厳しい現実的関心も持って居らず、従って礼俗との対決もないからであろう。礼俗の中に在って、しかも礼俗をはみ出した存在である憲は、一種の精神異常者に近い人物であったと把握して良いのではなからうか。彼が、現実の世界を常に冷徹なる目で洞察し得た結果、明確な意識を持って周囲に対して無関心で居れる境地に至って居るのであれば、言論風旨がなにも伝わらないと云うことは有り得ないであろう。要するに彼には、礼俗に対して云うべき何如なる思想もなく、自己を社会の中に独特な存在として位置づけようという意識も有りはしなかったのである。彼は本来無能なる無用人間であったと云わざるを得ない。この断定をさし控えるにしても、憲は礼俗や政

治に対立したりこれを批判したりする存在でもなく、それかと云って政治的社会的に何等かの能力を持つ存在であったとも云えないであろう。それでは、戴良とは異なった人物類型に属し、現実社会に対して積極的政治的なきわめて強い関心を抱いていると思われる郭泰や、現に政治的環境に身を投じた陳蕃や周挙等が、この憲にひかれるのは何故であろうか。また一方、孝廉に挙げられ、公府に辟され、終には「天下号曰徵君」とまで称えられる人物として注目されるのは何故であろうか。それは結論から先に云えば、後漢時代における処士尊重の風潮が極端に流れて、政治社会の中で、この様な人物を特待する様な状況が形成されていたからに他ならない。そこでは、人物あるいは徳行の面で、周囲の人々に特殊な評価を与えられる様な人であることが求められ、この場合、彼が現実的為政手腕を持っているかどうかは、大して問題にされていない場合が度々あった様に思われる。従って陳蕃や周挙等の政治家が黄憲の如き特殊な無用人間に注目し近づくのは、世間から特異な尊崇の対象とされる彼と接触を持つことで、社会的に自分自身の政治家としての評価が得られることをある程度期待しているからであると解して良かよろう。彼等が、「時月之間、不見黄生、則鄙吝之萌復存乎心」と云うのは、彼等の政治的辣腕が憲の具有するが如き無欲高潔なる心性に基調づけられ、また常にその様な心性を失わぬよう努力していることを公表せんとする意図に出るものである。またこの陳蕃が、徐穉を特賓として待遇する（徐穉伝）のも、「恭儉義讓、所居服其徳、屢辟公府、不起」と評された穉の人柄に接し浸り、その様な人格に最高の理解を示すことが、当時の政治家に期待される一要件であったからに他ならない。一方、当時の清流人士から注目を集めた郭泰が憲に近づくのは、儒教学者や知識人官僚層に連なる人々の支持を受ける清流人士としては当然で、憲自身が、清流の政治理論を積極的に支持するや否やは勿論大きな問題ではなく、泰が憲の持つが如き人格の一面を具有することまたその様な人物を大切にすることを、その交際に依って広める結果になればよかったのである。徐穉や

⑩

姜肱・申屠蟠らが清流人士から接近されたのも、彼等自身が積極的に清流人士で

あろうとしたからでもなく、政治に主体的関心を持ったからでもなかった。彼等の持つ処士的な人格が清流と現実的な関わりを持つように天下に聞えることが、政治の場で活躍する人々に必要であった当時の状況に依るのである。

(⇒)

後漢時代、官吏登用の規準が儒教的教養と徳行の面に置かれ、この中で処士尊重の風が次第に極端に墮し、形式化し、また一方、権力の維持や獲得、私的勢力の拡大の手段とされる傾向が生じたことは有名である。その結果、黄憲の如き人物<sup>⑤</sup>が特殊な注目を浴びるような事態が生じたと思われる。本人の政治的能力とは別に、政治家達から特殊な注目が集められた人物の例としては、例えば、韋著（列伝16）や王良（列伝17）等是有名であるが、特に著しい場合は、安・順帝の時の樊英（列伝72上）に見られる。

「列伝51」黄瓊伝に依れば、永建中、瓊は賀純・楊厚とともに徴召を受けたが応じなかった。そこで李固は彼に書を送り、当時徴聘された処士の多くは期待に満ちた者であったことを嘆き、この際召きに応じて存分の働きをし、処士の汚名を雪いで欲しいと訴えている。即ち「近魯陽樊君被徴初至，朝廷設壇席，猶待神明，雖無大異，而言行所守無欠，而毀謗布流，応時折減者，豈非觀聽望深，声名太盛乎，自頃徴聘之士胡元安・孟嘗・朱仲昭・顧季鴻等，其功業皆無所採，是故俗論皆言処士純盜虚声」と述べる。ここに見える胡元安は、『汝南先賢伝』に見える胡定のことと云われ、それに依れば、「至行絶人，在喪，雉免遊其庭，雪霜覆其室，県令遣戸曹掾，……定已絶穀，妻子皆臥在牀云々」とあり、袁宏『後漢紀』巻18には、鄭凱が「胡元安本曾參之至行，履楽正之純業，喪親泣血，骨立形存」と称めている。恐らくこのことで、永平の初、江革（列伝29）がその喪中の服し方が称められて孝廉に挙げられた時の様に、徴召の対象とされたものであろう。また孟嘗・仲昭については詳かでないが、顧季鴻は、「列伝」26張霸伝に、<sup>⑥</sup>  
「永元中為会稽太守，表用郡人処士顧奉公孫松等，奉後為潁川太守，……其余有業行者皆見擢用郡中争志節，習経者以千数，道路但聞誦声」とある顧奉のことで

あろう。しかし李固の云う如く、実察にはその現実的政治的能力とはかけ離れた所に挙用の規準が置かれている場合がしばしばあり、これが政治的現実にも身を投じて居る固には良く解ったのであろう。特に非難の集中した樊英の場合、その本伝(列伝72上)に依れば、彼は京氏易を習い五経に通じ、風角・星算・河洛七緯・推歩災異を善くしたと云う。壺山の陽に隠居して教授し、州郡や公卿の召きにも応じなかった。ある時遠く成都の火災を感知し、大雨を降らせて火を消したという評判が天下に広まり、安帝の時徴せられて博士となる。挙用の根拠は極めて非現実的と云わざるを得ない。予知や超能力が現実的な力として認められていたことが、英を不幸にする。建光元年(AD121)英以下孔番・李・郎宗・楊倫・王輔等に徴があるが、郎・楊以外はこれに応じない。この6人は各れも儒教学者であったらしく、注引の『謝承書』に依れば、孔は常に「幽居修志，銳意典籍」，李は「篤行好学，不羨榮祿」，王は「常隱居野廬，以道自娛」と云う。彼等はみな州郡や天子の召に応じなかった。各れも召致の規準は社会性や政治的手腕に置かれているのでなく、むしろ非現実的な超能力や学問的教養、またその隱逸的傾向が注目されているのである。郎は樊英と同じく風角・星算に詳しく、徴に依つて一旦議郎を拝し、具令に除せられるが、暴風に依って京都の大火を云い当てたことで博士に徴せられたことを恥じて遁去したと云う。「儒林伝」に見える楊は、少くして諸生となり郡文学の掾となったが、志時に垂き、人間の事には不向きと知って職を去り、州郡の令に応ずることなく弟子の教育に当った。後、安・順帝の時、徴されるが、直諫が時勢に合わず、閉門して公車徴にも応じなかったと云う。彼等もやはり現実的政治には不向きな無用人間であったのである。この点で大差のない樊英の場合は、処士尊崇の理念に乗っかった国家権威に翻弄された感が強い。永建2年、順帝の徴召に対し、疾篤しという理由で固辞するが、詔して郡県を切責して、京師に召き寄せて、怒った帝は、「朕能生君，能殺君，能貴君，能賤君，……君何以慢朕命」と絶対的な権威を誇示する。しかし英は「臣受命於天，生尽其命，天也，死不得其命，亦天也，陛下焉能生臣，焉能殺

臣」と応対する。帝も終にこれを屈することができないが、帝が、英の飄逸の論を許容し、その病身を勞って月々に羊酒を致すという権力者の寛大さを公表する行為によって、国家の權威が保たれ、飄逸大儒を礼遇することで、為政の理念が儒教尊重の幹線を脱していないことを天下に示し得たことになる。これは国家権力の維持と安定を期待する権力者の一大デモンストレーションであったと見ることができる。また永建4年（AP129）には、帝は英のために壇席を設け、「令公車令導，尙書奉引，賜几杖，待以師傅之礼，延問得失」という最高級の礼遇を用いる。終に英も五官中郎將を拜することになるが、数月にして、疾篤しという理由で退こうとすると、光祿大夫を与えられ、一方的に「令在所送穀千斛，常以八月致牛一頭，酒三斛，如有不幸，嗣以中牢」の様な待遇を与えられる。現実対応に無能な一学者が、実質的な権力を維持できなくなった中央権力の示威欲に引き回されているのである。表面的には、支配の頂点に立つ帝王の權威と寛大さを公表するに足る演出と見えるが、実は、無能な人物をこんなにしてまで茶番劇の相手役に引き込まねばならぬ程に、王朝の実質的な権力が様々な不安の要因を抱えていたことを物語るに他ならない。処士の尊重や飄逸大儒の挙用は、儒教の精神を実質政治の場に活用することで、国家の權威と政情とを安定させる目的を果して来たはずであるが、このやりとりを見ると、王朝の權威はもはや飄逸の論理をも支配できなくなっていることが解る。そして同時に、実質的な為政手腕を持たぬ無用人間にとって、一種の特殊な社会的地位とも云えるものが約束される状況が醸成されているのだと云うこともできるであろう。英に対する周囲の批判も厳しく、「及後應對，又無奇謀深策，談者以失望」とあり、張楷は英に向かって「及其享受爵祿，又不聞匡救之術，進退無所拋矣」と云ったとあるが、范曄が論において、「世主礼之以得衆」と指摘する様に、現実を洞察し得ない権力者のデモンストレーション<sup>①</sup>に巻き込まれた英自身にとっては過酷な批判であったと云わざるを得ない。自らは「終始不仕」を貫いた張楷（列伝26）の批判は、裏がえせば、政治世界に対して間隔を保つことで一定の社会的評価を得、各々に特殊な地位を与え

①

られることに満足している処士隠逸の、一種の危機感より出でるものであったと云えよう。英の名誉失墜は、隠逸的処世者の社会的評価を一樣に下落させ、彼等に対して形成されつつある社会的地位を崩壊させる危惧をはらんでいるからである。なお徴や辟の対象とされた人物が全く現実的な対応の出来ないもう一つの例として、向栩（列伝71）の場合を見ておく、彼は、「性卓詭不倫、恆誑老子、状如学道、又似狂生、好被髮著絳綃頭、……或悉要諸乞兒俱歸止宿、為設酒食、時人莫能測之」の如く、後世の阮籍を思わせる人物であるが、辟せられて孝廉・賢良方正・有道に挙げらるるも就かず、公府の辟にも到らず、姜肱・韋著らと共に徴せらるるも応じなかった。後に特徴により趙相を拜するが、「及到官、略不視文書、舍中生蒿萊」という勤めぶりであった。また張角の乱に際しては、国の兵を興すことに反対して、「但遣將於河上、北向誑孝經、賊自当消滅」という様な非現実的な奏上をなし、角に内応する者かと疑われて、終には殺されるのである。

### (三)

以上、後漢中期以後、儒教精神を現実化する理念に発する処士尊重の風が形式化して来た社会情勢を背景として、現実の社会における政治的対応の能力とは縁遠い隠逸的存在者が、現実社会において特殊な社会的地位を獲得した例を取り上げた。初に見た黄憲にしても、この観点に立てば、彼の常人を逸した不可解な性格や無用の度合が深ければ深い程、世人に特殊な興味を持たれ、一種の底知れぬ尊崇の念を形成させたことが理解できそうに思われる。そして同列伝中に見える他の処士達も、人格や教養は各々異質ではあるが、社会に対する無用さの姿勢が自らを擁護し、人々に尊崇されたことは、この黄憲と大略同様であった見得るのではなかろうか。桓帝の時、魏桓は徴せられて、「夫干祿求進、所以行其志也、今後宮千数、其可損乎、…左右悉權豪、其可去乎」と云って出仕せず隠身したとある。一見現実権力に対する厳しい批判の如く見えるけれども、自らの隠居を正当化するための言にすぎない。この点では姜肱も同様で、太守に挙用せんと詔に対して、「吾以虚獲实、遂藉声价、明明在上、猶当固其本志、況今政左闕暨、

夫何為哉」と友人に告げ、「隱身遁命，遠浮海矣」とあるが、その言と行動は現政局への批判の如く見えながら、やはり自らの社会的活動の場から退いて在る生活を擁護するための言にすぎない。彼の言を見れば、本来仕える意志は持たないこと、そして社会的無用人であることに処世の理想を定めていることが解る。彼はまたそう述べることで、その様な理想を持つ者に与えられる社会的評価なり地位なりを維持するのである。彼になにも社会や政治に対して積極的批評をなす意志はなく、特に濁流に対して激しい嫌悪感を抱いているわけでもない。唯、今ここでその無用人としての処世があわただしい政局を反映して、許されそうになくなったから身を隠すのである。彼等が政治参加をしようとする意志を持たない理由は、清濁流の政争以前の問題として考察しなければならないであろう。申屠蟠は知識人官僚范滂の政治活動が盛んになり、「太学生争慕其風，以為文学將興，処士復用」という情勢に対して、「戦国之世，処士横議，…卒有阡儒燒書之禍，今之謂矣」と評して、身を隠し「因樹為屋，自同傭人」とあるが、彼自身の政治理論に依って社会を批判した言葉や態度とは受け取れない。処士としての社会における場が保障されなくなるかも知れぬことを危惧しているのが実であって、身を隠すのはその為である。また隠身はなにも現実政治社会への抗議などという大それた態度と評価することはできまい。後、中平5年にも博士として徴せられ、その後荀爽・韓融・陳紀等は公車徴に応じるが、蟠だけは到らなかった。その為、董卓による暴政からも兵乱からも身を護ることができたという。蟠の処世が政治の混濁に対する批判に依るものと見ることもできそうであるが、彼自身が積極的な政治活動や理論を呈示せぬ以上、断定するのはためらわれる。袁閔（列伝35）が延熹の末に党錮のまさに起らんとした時、散髪して世を絶ち、深林に隠れようとしたのも、時政に対する抗議ではない。彼はそれ以前から「累徴聘拳召，皆不応，居処仄陋，以耕学為業」の様な処世を続けて居るからである。ただ彼がこの様な生き方をするのは、後漢末の様々な混乱の中で、処士としての以前のような処世を護るためであり、身辺で起る様々の危機に対する身構えであった

ことは認めなければなるまい。袁閔や申屠蟠等にとって、隠逸の処世が、社会における特殊な尊崇対象としての地位に甘んずるだけでなく、危機回避にも役立っていることは、後漢末において、隠逸することに新たな意義が生じたことを物語っている。党錮事件から後漢末の動乱世相を背景に、危険を回避する為に殊更に隠逸的な生き方を形成した官界人も多いことは、例えば荀爽（列伝52）の場合でも明らかである。党錮の事件をきっかけに、清流人士の隠逸的傾向が強まったと

⑩

云われる。それは事実である。しかし隠逸的風潮がこれをきっかけに形成されたと云うことはできない。この風潮はやはり後漢時代における処士尊重の風によって、次第に隠逸的な処世に一定の社会的評価が定着してゆき、彼等に対する社会的存立の場が設けられるようになったこと、またこの様な存り方が政治的環境に対する直接的関わりを拒否するものであるから。政権獲得の抗争の渦中に巻き込まれる危機感から逃れるには、最もふさわしい生活環境であったこと等を踏まえて、その為に、この様な隠逸的な生き方に新たな危機回避の可能性が見出されたのだということ を先づ確認しておく必要がある。党錮等、後漢末の様々の知識人や政治家を取り巻く危機に際して、隠逸的処世が、世人の尊崇を集める一種の社会的地位を意味するものから、この性格を一部に含んで、世の混乱や危険を回避する手段として、新たな政治的意味を持つ在り方として、注目されたのである。魏晋時代における隠逸者には、この後漢末に迎えた隠逸理念の転機の様相が複雑に反映している。黄憲・徐稭・姜肱等は、後漢時代処士尊重の風の延長線上に登場し、更に後の時代の隠逸的処世を支える理念が形成される接点に位置していると云えよう。この意味において彼等はまた党錮事件を回避した隠逸政治家との関連において論じられる余地を持つことも確かである。この点を今少し究めたいが本稿ではこれを論ずる余裕がないので、稿を改めたい。

以上、処士尊重の風が、政治権力の形成と深い関わりを持ちつつ、政治活動の面から見れば、全くその能力もなくしかもこれを拒否する人物、いわば社会的には無用である人物の為に、特殊な社会的地位を与える結果を招来し、隠逸的存在

者が社会的に保護される状況を獲得したことを論じ、後漢末期においては、政治的世界における危機回避の保身手段としての一面も加えて、新たな展開を遂げる契機ともなったことを略述した。

## 註

- ① 「後漢党錮事件の史評について」増淵龍夫（『一橋論叢』44巻6号）や「漢末のレジスタンス運動」川勝義雄（『東洋史研究』25巻4号）等。徐穉も茅容に、郭泰への伝言を託して、「大樹將顛、非一繩所維、何為栖栖不遑寧処」と云っているが、政治的な活動とは関わりを持つまいとする意識から出た言葉であろう。清流人士から評価・尊敬されていたとしても、それは儒家的イデオロギーに立つ清流派にとって、その活動の理念なりイメージ形成のために、意識的な接近がなされたからであり、穉自身は清・濁の各れとも積極的関わりのない生き方の中に在ったと見るべきではなかろうか。後文にも述べるが、姜肱もまた本来隠逸的な生き方を信条として持つことを自分の言葉に表明しているし、申屠幡もその隠逸行為は、党錮を予め警戒したらしくは見えるが、本来出仕の生活とは無縁の世界に甘んずる境地に在ることは、南郡の一生との対話を見ても明らかである。また、袁閔や徐穉の子の胤、それに酈玄等に対しては黄巾の賊も敬意を表したのは、逸民的人士が一般民衆から親近感を持たれた証であるとされる意見（川勝氏）は当たっていると思うが、「単にかれらの徳を顕彰する修辞にすぎないかもしれぬ」（川勝氏）という見解が捨て難い。同じ様なエピソードは後漢初の周党（列伝73）にも見えるし、荀愨（列伝43）・韓韶（列伝52）等の場合も同様である。江革伝にも老母への孝が賊を感ぜしめた話があり、『後漢書』中この様な事例は多い。私は彼等が一般民衆のレベルで賢者として尊敬を受ける様な社会意識が形成されていたことにむしろ深い関心を抱いている。この他後漢末の党錮を中心とする論文は多数あるが、『門閥社会成立史』矢野主税・「後漢末の清流について」東晋次（『東洋史研究』32巻1号）・「後漢後期の政局をめぐって——外戚・宦官・清流士人——」多田隼介（『史学研究』16）・「范曄と後漢末期」吉川忠夫（『古代学』13巻3・4号）等々、各々に優れた見解が見える。中国人のものとしては、『中国思想通史』の他、「東漢党錮人物分析」金発根（『歴史語言研究所集刊』34本）・「東漢的豪族」楊連陞（『清華學報』11巻4朝）等がある。
- ② 後漢時代の死士尊重の風と隠逸思想形成については、拙稿『隠逸者と権力者』——『後漢書』の隠逸の場合——（『福岡女子短大紀要』12号）に述べた。また関連諸論文もかの稿に揚げたので重複を避ける。なお最近、『後漢の選挙における推挙の辞退』福井重雅（『東方学』57輯）の論考がある。
- ③ 列伝43の本伝に依れば、陳蕃が三公となって朝に臨んだ時、「叔度若在、吾不敢先佩印綬矣」と云ったとあるから、これが陳蕃伝（列伝56）の「（延熹）八年（陳蕃）代楊秉為太尉」の時の言葉とすれば、この時（AD 165）憲は、本伝に云う48才の生をすでに終えていたことになる。
- ④ 陳・周・郭等すべてが、自分の活動を意識的なゼスチャーで修飾したと断定するのは

誤解かも知れないが、特に郭泰の場合には、その本伝を見ても、世評で自己を政治的にアピールする傾向は濃厚である。『抱朴子』外篇正郭における葛洪の郭泰批判が極端であるにしても、後漢末、またその後における郭泰の評判が、必要以上に誇張されている一面も見逃がすことはできない。なお岡村繁先生の「郭泰の生涯とその為人」（『支那学研究』15）・「郭泰・許邵の人物評論」（『東方学』10）は興味深い論文である。また余論ながら、53年10月訪中の際、北京図書館で、清王広恕撰の『抱朴子外篇注』稿本九冊を閲覧する機会に恵まれた。外篇50巻が、第1冊甲より始まり、第9冊壬癸に終わっている。注は詳細であり、研究者の為に、刊行の1日も早からんことを願う。

- ⑤ 前注②の諸論に詳しい。
- ⑥ 列伝29江革伝には、「及母終、至性殆滅、嘗寢伏家廬、服竟、不忍除、郡守遣丞掾积服、因請以為吏、永平初、举孝廉為郎」とある。また章帝の建初の初めには、賢良方正に挙げられ、元和中には、「天子思革至行、制詔齊相曰、諫議大夫江革、前以病歸、……国家每惟志士、未嘗不及革、具以見穀千斛賜巨孝、常以八月長吏存問、致羊酒、……及卒、詔復賜穀千斛」という。この他列伝29には、孝の行いが為政者の注目賞揚するところとなる事例が見られる。
- ⑦ 例えば、辟や徴に応じず、返ってそのために名声を高め、終には東海相となった韋著（列伝16）の場合、政にも失敗し姦人の害するところとなって、隠者はこれを恥じたと批判的な史料が見えるが、隠者が恥としたのは、彼ら自身の社会的名誉の失墜と、権力の世界との特殊な関係において形成されている社会的地位が失われることに対する危惧に発する批判であり、韋著自身は、民心を安定させ政情の正常なることを天下につくり知らしめん目的の下に行われた権力者のデモンストレーションに巻き込まれた一種の犠牲者と見ることもできる。列伝16には、「靈帝即位、中常待曹節以陳蕃・饗氏既誅、海内多怨、欲借寵時賢以為名、白帝就家拜韋著東海相、詔書逼切、不得已、解巾之郡」とある。同じことを姜肱伝（列伝43）では、「欲借寵賢德、以积衆望」と述べ、『後漢紀』巻23には、「……海内寃之、曹節善招礼名賢、以衛其罪、及言於帝、就拜姜肱……韋著為東海相」と云う。
- ⑧ 推挙の辞退・拒否は、現実には、自己の社会評価をそのつど高めるものであったことは、既に諸論文の指摘するところであり、辞退・拒否にかかわらず、推挙の対象者が、官界においては就官したと同様に扱われ所遇されていることは、福井氏（前注2）の指摘されるとおりである。
- ⑨ 列伝67の夏馥・張儉・岑暉・何顛等は党錮を避けて身を隠したことが明瞭である。

（広島大学）

Yin—yi (隱逸) ,at the Close of the Hou—Han (後漢) Dynasty

Takao Shimomi

In the Hou—Han (後漢) dynasty, the Confucianism was employed as an important ideology in the political world. A man of power valued chu—shi (處士) s who were renowned for their Confucian virtue, and often appointed them government officials. But almost always, chu—shis refused such appointments. Some of them got positions as government official affair repeated refusals. So chu—shis had their social positions by means of keeping out of the politics. Consequently, yin—yi (隱逸) s who had dislike to their taking part in politics and wanted to seclude themselves from society also came to be valued in the political world. Chu—shis and yin—yis, though some of them were unable to take reigns of government, got positions of high social status. At the close of the Hou—Han dynasty, we can point out, most of the intellectuals cherished yin—yi ideas.